

論文

SNSコミュニケーションの顕在化に関する心理機序について

Psychological mechanism about the emergence of SNS communication

大和田智文^{*1}, 御幸 大聖^{*2}

要約：今日、SNSは対人コミュニケーションの重要なチャネルとして日常生活にはなくてはならないものになっている。心理学領域におけるSNSコミュニケーションに関する研究では、SNSの利用がもたらす功罪や、それに関連するパーソナリティに着目した議論が主になされてきていた。しかしながら、SNS上にさまざまな発言を顕在化させてしまう心理機序をFTFコミュニケーションと関連づけながら検討した研究は見当たらなかった。本研究では、大学生におけるSNSの利用実態とSNS上に見られる社会的不適切行為との関連に着目し、この社会的不適切行為が、FTFコミュニケーションによってすでに存在していた行為がSNSを通して顕在化されたもの（SNSの不適切行為表出の媒介機能）なのか、それとも、SNSによって新たに生み出された行為（SNSの不適切行為創出機能）なのか、すなわち、SNSコミュニケーションの顕在化に関する心理機序についての検討を行った。兵庫県内の私立大学学部生計97名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、FTFにおいて不適切発言を経験することが、SNSへの不適切発言投稿経験に影響を及ぼしていた。一方で、FTFでの不適切発言を多く経験している者がSNS上に見られる社会的不適切行為に対する許容度を高めてしまうことが、SNSへの不適切写真投稿経験に影響を及ぼしていた。加えて、SNSを利用した自己開示欲求もSNSへの不適切写真投稿経験に影響していた。すなわち、SNSへの不適切発言投稿に対してはSNSの不適切行為表出の媒介機能が、SNSへの不適切写真投稿に対してはSNSの不適切行為創出機能がそれぞれ働いていたことが示唆された。以上より、SNSへの不適切発言投稿経験とSNSへの不適切写真投稿経験とでその発現機序は異なっていると考えられた。

Key Words：SNS, FTF, コミュニケーション, 不適切行為, 大学生

問 題

スマートデバイスの目覚ましい普及に伴い、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（Social Networking Service, 以下、「SNS」と記載）も多くの人にとって身近で日常的な存在となった。これまでは対面場面（Face-to-Face, 以下、「FTF」と記載）での交流が一般的であったものが、日常場面へのSNSの普及により、対人間の交流形態も大きな変貌を遂げた。これまでも、携帯電話を用いた電子メールなどSNSと同様のデジタルデバイスを用いた通信手段（Conventional Computer-Mediated Communication, 以下「CCMC」と記載）は存在していた。このCCMCは、基本的には1対1の関係を想定したコミュニケーションであったが、デバイスの操作の容易性などにより状況によってはFTFコミュニケーションに

とって代わり、対人コミュニケーションの範囲や頻度を飛躍的に拡大化することに貢献してきている（cf., 総務省, 2013a）。

それに対してSNSは、「登録された利用者同士が交流できるWebサイトの会員制サービス」（総務省, 2013b）であり、SNSを利用したコミュニケーションもCCMCとは利用目的や利用方法において異なる部分も多い。TwitterやFacebook, LINEなど、代表的なSNSに共通する特徴として、時間を気にせず、いつでもどこでも情報を気軽に発信することができる「容易性」（cf., 総務省, 2013a, 2014, 2015）、必要な情報をさまざまなソースから素早く入手することができる「即時性」（cf., 総務省, 2014, 2015, 2016）、多くの人がとと同時に情報のやり取りを行うことができる「拡散性」（cf., 総務省, 2013a, 2014, 2015, 2016）などが挙げられる。

このようにSNSは、CCMCと比べても、より気軽に素早く多くの人がとと同時にコミュニケーションを行うことが可能であるため、今日では対人コミュニケーション

2017年2月22日受理

^{*1} Tomofumi OWADA

関西福祉大学 発達教育学部

^{*2} Masatoshi MIYUKI

東浦平成病院

ンの重要なチャネルとして多くの世代に浸透し、すでに日常生活にはなくてはならないものになったといえよう。

こうした利便性に優れる一方で、SNS にはさまざまな問題点や危険性が潜んでいることも指摘されている。たとえば、情報プライバシーとインターネット上におけるコミュニケーション行動との関連について検討した佐藤・太幡（2014）は、自伝的情報（過去の出来事のような私的な情報）や属性情報（性別や職業などの情報）にプライバシーを感じる程度の低い者ほど、インターネット上における対人関係獲得行動や自己演出行動、自己開示行動などを活発化させる可能性を示唆している。

また、インターネットにおけるブログおよびゲーム利用がインターネット上での行動に及ぼす影響を検討した藤・吉田（2009）によると、インターネット上でのブログは、多数の人びとと意見交換しつつ自己を振り返る場となる側面を備えているため、自己の客観視や明確化を生じさせ、他者との関係を改善していく効果を持つものであることを示唆している。また、インターネット上でのゲームは、所属感を高めたり、現実社会にも一般化可能なコミュニケーション・スキルの学習機会を提供する機能を備えていると考察している。その一方で、自己開示的な態度でゲームに参加したり、没入的・依存的にブログやゲームに関与することは、社会性の低下や攻撃性の増大へと繋がりやすくなることを示唆している。

また、SNS 利用時の行動と、性格特性およびインターネット利用の意識や行動との関連を検討した高橋・伊藤（2016）によると、SNS へのコミットメントが強いほど SNS への依存的関与・没入的関与・非日常的関与が高く、現実とのバランスを欠いた SNS の利用実態があることがうかがえた。また、誠実性の低さや情緒不安定性の高さは、SNS 利用と現実とのバランスを崩す要因であることを示している。

また、大学新入生の友人関係における FTF および SNS コミュニケーションについて縦断的検討を行った黒川・吉武・中山・三島・大西・吉田（2015）は、SNS は FTF と比較して、コミュニケーションの対象が変わりやすく、表面的な友人関係の形成に留まりやすいことを示唆している。加えて、大学にて形成された友人関係において、いかに FTF コミュニケーションを行えるかが友人関係満足感に繋がっていく可能性を報告している。すなわち、SNS コミュニケーションが友人関係満足感を直接予測するのではなく、SNS コミュニケーショ

ンは FTF コミュニケーションを補完する役割にとどまるものであるため、友人関係の深化には FTF による相互作用が重要であるという。

また、友人関係とソーシャル・スキル、援助要請方法との関連を検討した渡部・永井・桑原（2014）は、ソーシャル・スキルが高い学生ほど FTF による援助要請を行うことが多くなることを明らかにしている。加えて、援助要請の際に FTF による援助要請を行うことによって友人関係満足感が高まることも示している。一方、SNS による援助要請にはソーシャル・スキルの影響はみられず、それを行うことが友人関係満足感を高めるまでには至らない可能性を指摘している。

同様に、大学生の日常生活におけるポジティブ・イベントの構成要素について検討した本多（2016）は、友人関係においては、SNS などを介した間接的なコミュニケーションよりも、実際に友だちに会う、食事に行くといった直接的なコミュニケーションをポジティブ・イベントとして認識していることを示唆している。

このように SNS は、気軽に素早く多くの人びとと同時にコミュニケーションを行うことが可能であるため、友人関係を形成するきっかけを作るための、あるいは関係を形成する際のハードルを下げるためのコミュニケーション・チャネルとして有効に機能するものであるといえよう。一方で、没入的・依存的な SNS 利用は、社会性の低下や過度に対人獲得的・自己開示的な行動を誘発することもあり、現実とのバランスを崩しかねない危険性も兼ね備えているものであることが分かる。また、SNS 利用は友人関係満足感を高めないこともほぼ一貫して確認されている。以上より、SNS コミュニケーションは、日常の FTF コミュニケーションのあり方によってポジティブな側面がうまく機能することもあれば、ネガティブな側面のみが機能してしまうこともあることが考えられる。したがって、SNS の対人コミュニケーションへの影響過程は、FTF コミュニケーションを含む包括的対人コミュニケーションの文脈にて議論される必要があるだろう。

ここで、現代社会における SNS 利用に関連した事例を概観すると、ある特徴的な事例が目につくようになってきていることに気づく。たとえば、この数年、社会的に不適切と思われるような発言や写真を SNS に投稿する事例が頻発するようになってきている。これらの中には、公共施設における意図的な危険行為や不特定多数の人びとが利用する店舗内における不衛生な行為など、社会

通念上認められないような行為も含まれる（朝日新聞, 2013a, 2013b）。このような社会的不適切行為（以下、「不適切行為」と記載）は、大学生など特に若者世代に顕著であるように思われる（e.g., 朝日新聞, 2013a, 2013b）。

このような不適切行為を理解する際にも、既述のように、FTF コミュニケーションと関連づけた理解方略が必要となろう。すなわち、FTF コミュニケーションから SNS コミュニケーションへどのような影響がみられるのか、あるいはそもそも影響はないのか、といった視点からの検討である。たとえば、この視点から検討すると、上記のような不適切行為は、FTF コミュニケーションによって既に存在していたものが SNS によって媒介され、社会的に顕在化したものなのか、あるいは、FTF コミュニケーションとの関連はそれほど強くはなく、むしろ SNS そのものにこうした行為を生み出す機能が備わっているのか、といった疑問が生じてくる。しかしながら、心理学領域における SNS コミュニケーションに関する研究では、主に SNS の利用がもたらす功罪や、それに関連するパーソナリティに着目した議論がなされてきている。したがって、SNS 上にさまざまな発言を顕在化させてしまう心理機序を FTF コミュニケーションと関連づけながら包括的な文脈で検討した研究は

ほとんど見当たらないのが現状である。

そこで本研究では、大学生における SNS の利用実態と SNS 上に見られる上記のような不適切行為との関連に着目し、この不適切行為が、FTF コミュニケーションによってすでに存在していた行為が SNS を通して顕在化されたもの（SNS の不適切行為表出の媒介機能）なのか、それとも、SNS によって新たに生み出された行為（SNS の不適切行為創出機能）なのかについて検討を行う。すなわち、SNS コミュニケーションの顕在化に関する心理機序についての検討である。

方 法

調査対象者

兵庫県内の私立大学における授業にて受講者に質問紙調査への協力を依頼し、協力への同意が得られた同大学の3年次生および4年次生計97名（男性43名、女性54名）を対象に質問紙調査を実施した。回答は無記名、任意であることが口頭および文書にて説明された。平均年齢は21.22歳（ $SD = 0.78$ ）であった。

調査時期

2014年8月上旬から下旬であった。

質問紙構成

対面場面における不適切行為に対する許容度 対面場

Table 1 対面場面における不適切行為に対する許容度に関する項目

スーパーのアイスのケースに頭をつっこんだ
拾ったクレジットカードを使用した
無銭飲食をした
未成年者が喫煙をした
未成年者が飲酒をした
駅の線路に侵入した
電車内で他の乗客を盗撮した
飲食店に置いてある調味料の容器を鼻に突っ込んだ
有名人がアルバイト先に来たことを知人に話した
万引きをした
子供が店の商品に傷をつけたのに、親はそれを見て見ぬふりをした
ゲーム、音楽などを違法ダウンロードした
バス、電車等で無賃乗車をした
高速道路を自転車で行った
コインランドリーの乾燥機の中に入った
パトカーの上に乗って写真を撮った
公衆電話のボックス内で花火を行った
回転寿司の店舗でレーンを流れている寿司に煙草をのせた
アルバイト先のビザ屋でビザ生地を顔に張り付けた
アルバイト先の商品を無断で持ち帰った

Table 2 SNS上に見られる不適切行為に対する許容度に関する項目

スーパーのアイスのケースに頭を突っ込んでいる写真を「今日暑くない?」という文章と共に SNS に投稿した
「拾ったクレジットカードで買物をした. 何でも買える.」とクレジットカードの写真と共に SNS に投稿した
「逃走〜.」と無銭飲食をしたことを写真と共に SNS に投稿した
「喫煙中.」と未成年者が喫煙している写真を SNS に投稿した
「卒業記念.」と未成年者が飲酒している写真を SNS に投稿した
「駅の線路に入った. サラリーマンがすごく怒っている.」と駅の線路の上に乗っている写真を SNS に投稿した
電車で床に座っている学生を盗撮し, 「マナー違反だ.」と写真を SNS に投稿した
飲食店に置いてある調味料の容器を鼻に入れた写真と共に, 「俺の鼻くそ食べる人かわいそう.」と SNS に投稿した
有名人がアルバイト先に来たことを監視カメラの画像と共に SNS に投稿した
「万引き. 爆笑.」と店の商品をかばんの中に入れていた写真を SNS に投稿した
「買う人が可哀想.」と子供が菌型をつけた商品の写真を投稿した
ゲーム, 音楽を違法ダウンロードしたことを証拠のデータと共に SNS に投稿した
バスの車両の後部にしがみつき無賃乗車をしている写真を SNS に投稿した
「悲鳴をあげながら走った.」と高速道路を自転車で行っている写真を SNS に投稿した
コインランドリーの乾燥機に入っている写真を SNS に投稿した
「パトカーを荒らしてきた.」とパトカーの上に乗っている写真を SNS に投稿した
公衆電話のボックス内で花火を行っている写真を SNS に投稿した
回転寿司の店舗で「そのまま流れていった.」とレーンに流れている寿司にタバコを差し込んだ写真を投稿した
「ビザって息ができない.」とアルバイト先のピザ屋でピザ生地を顔に貼り付けている写真を SNS に投稿した
「今日の収穫.」とアルバイト先から無断で商品を盗んできたことを写真と共に SNS に投稿した

Table 3 SNSの利用実態に関する項目

SNS (Facebook, mixi, twitter 等) を利用していますか? また, 過去に利用していたことはありますか?
SNS を不特定多数との交流目的で利用していますか?
SNS の公開範囲を誰でも見ることができるようにしていますか?
SNS に不適切と思われる行為の写真を投稿したことはありますか?
SNS に不適切と思われる発言を投稿したことはありますか?
あなたは以前からそのような発言をしていましたか? ¹⁾

面における不適切行為（以下、「対面場面」と記載）に対する許容度について、独自に作成した項目（計 20 項目）を用いて 5 段階評定（「1. 許容できない」から「5. 許容できる」）にて尋ねた。項目は、ニュースや社会現象として顕著なものを収集の上作成された。この収集作業には、調査開始時期のおよそ 1 年前までの新聞記事の社会面を主な情報源として用いた。作成された項目を Table 1 に示した。

SNS 上に見られる不適切行為に対する許容度 SNS 上に見られる不適切行為（以下、「SNS 上」と記載）に対する許容度について、「対面場面」で作成された項目をもとに作成した項目（計 20 項目）を用いて 5 段階評定（「1. 許容できない」から「5. 許容できる」）にて尋ねた。用いた項目は Table 2 に示した。

SNS の利用実態 SNS の利用実態について計 6 項目を用いて尋ねた。用いた項目は Table 3 に示した。

SNS を利用した自己開示欲求 SNS を利用した自己開示欲求について、「あなたは SNS を利用して自己開示することに積極的ですか?」の 1 項目を用いて、5 段階評定（「1. 消極的」から「5. 積極的」）にて尋ねた。

人口統計学的変数 所属、学年、年齢、性別について尋ねた。

結 果

SNS の利用実態

調査対象者の 82.47% (80 名) が、これまでに何らかの形で SNS を利用した経験があったが、その他の 17 名は利用経験がなかったため、この 17 名は以下の分析より除外することとした。その結果、分析対象者は計 80 名（男性 33 名、女性 47 名）、平均年齢は 21.19 歳 ($SD = 0.78$) となった。上記以外の利用実態に関する各項目の回答者数を Table 4 に示した。SNS で不適切行為をし

たことがある者が20.0%（計16名）おり、そのうちの56.3%（9名）が以前よりFTFにおいて同様の行為を行っていた。

対面場面およびSNS上に対する許容度の関連性

対面場面およびSNS上の許容度の相関を検討したところ、強い正の相関がみられた（ $r=.756$, $p<.001$ ）。

SNSの利用実態および性別と対面場面およびSNS上に対する許容度との関連性

SNSの利用実態および性別と対面場面およびSNS上に対する許容度との関連性を検討し、結果をTable 5に示した。その結果、対面場面・SNS上に対する許容度ともに、SNSへの不適切写真投稿経験ありにおいて得点が有意に高かった（ $t(6.37)=2.64$, $p<.05$, $d=1.67$; $t(78)=4.57$, $p<.001$, $d=1.81$ ）。また、対面場面・SNS上に対する許容度ともに、SNSへの不適切発言投稿経験ありにおいて得点が有意に高い傾向にあった（ $t(15.97)=2.01$, $p<.10$, $d=.81$; $t(16.15)=1.95$, $p<.10$, $d=.79$ ）。SNS上に対する許容度は、FTFでの不適切発言経験ありにおいて得点が有意に高い傾向にあった（ $t(78)=1.73$, $p<.10$, $d=.62$ ）。

SNSを利用した自己開示欲求と対面場面およびSNS上に対する許容度との関連性

SNSを利用した自己開示欲求（ $M=2.48$, $SD=1.14$ ）と対面場面およびSNS上に対する許容度との関連性を検討したところ、対面場面に対する許容度との間に弱い正の相関（ $r=.208$, $p<.10$ ）がみられた。SNS上に対する許容度との間には有意な相関はみられなかった

（ $r=.072$, $n.s.$ ）。

以上より、不適切行為に対する許容度は、不適切行為経験者やSNSを利用した高自己開示欲求者において高いことが確認された。

SNSにおける不適切行為を目的変数とするロジスティック回帰分析結果

SNSにおける不適切行為に影響を及ぼす要因を明らかにするため、対面場面に対する許容度、SNS上に対する許容度、FTFでの不適切発言経験（0=投稿経験自体なし、1=なし、2=あり）、対面場面に対する許容度とFTFでの不適切発言経験の交互作用、SNS上に対する許容度とFTFでの不適切発言経験の交互作用、およびSNSを利用した自己開示欲求を説明変数、不特定多数との交流目的（なし=0、あり=1）、公開範囲無制限（0=なし（=制限あり）、1=あり（=制限なし））、および性別（0=女性、1=男性）を統制変数、SNSへの不適切発言投稿経験（0=なし、1=あり）、および不適切写真投稿経験（0=なし、1=あり）を目的変数とするロジスティック回帰分析を行い、結果をTable 6に示した。その結果、SNSへの不適切発言投稿経験および不適切写真投稿経験に対しては、FTFでの不適切発言経験の主効果が有意もしくは有意傾向を示した（ $\beta=.870$, $p<.001$; $\beta=.151$, $p<.10$ ）。また、SNSへの不適切写真投稿経験に対しては、SNS上に対する許容度とFTFでの不適切発言経験の交互作用と、SNSを利用した自己開示欲求の主効果がそれぞれ有意となった（ $\beta=.421$, $p<.05$; $\beta=.475$, $p<.05$ ）。交互作用について単純主効

Table 4 SNSの利用実態に関する各項目の回答者数（ $n=80$ ）

SNSの利用実態 \ 回答	あり / なし / 投稿経験自体なし（人）
不特定多数との交流目的	26 / 54 / —
公開範囲無制限	28 / 52 / —
SNSへの不適切写真投稿経験	7 / 73 / —
SNSへの不適切発言投稿経験	15 / 65 / —
FTFでの不適切発言経験	9 / 8 / 63

Table 5 不適切行為に対する許容度の平均値（ SD ）と分析結果（ $n=80$ ）

SNSの利用実態 \ 許容度	対面場面に対する許容度	p	SNS上に対する許容度	p
不特定多数との交流目的	(あり / なし) 1.69 (0.49) / 1.74 (0.57)		1.38 (0.45) / 1.44 (0.54)	
公開範囲無制限	(あり / なし) 1.61 (0.45) / 1.79 (0.58)		1.36 (0.40) / 1.45 (0.56)	
SNSへの不適切写真投稿経験	(あり / なし) 2.48 (0.81) / 1.65 (0.46)	*	2.16 (0.63) / 1.35 (0.43)	***
SNSへの不適切発言投稿経験	(あり / なし) 2.07 (0.80) / 1.65 (0.43)	†	1.73 (0.73) / 1.35 (0.41)	†
FTFでの不適切発言経験	(あり / なし) 2.08 (0.77) / 1.68 (0.50)		1.69 (0.66) / 1.38 (0.48)	†
性別	(男性 / 女性) 1.76 (0.62) / 1.70 (0.49)		1.53 (0.62) / 1.34 (0.39)	

*** $p<.001$ * $p<.05$ † $p<.10$

Table 6 SNSにおける不適切行為を目的変数とするロジスティック回帰分析の結果 (n=80)

説明変数	SNS への不適切発言投稿経験	SNS への不適切写真投稿経験
対面場面に対する許容度 ①	.026	-.163
SNS 上に対する許容度 ②	-.005	.402
FTF での不適切発言経験 ③	.870***	.151†
①×③	-.030	-.005
②×③	.020	.421*
SNS を利用した自己開示欲求	.008	.475*
不特定多数との交流目的	-.006	.098
公開範囲無制限	.309***	.261
性別	.315***	-.050
R ²	.998***	.878***

表中の数値は近似標準化係数である。

*** $p < .001$ * $p < .05$ † $p < .10$

果の検定を行った結果、FTF での不適切発言経験を多く経験している者における SNS 上に対する許容度が有意であった ($p < .05$)。

すなわち、SNS への不適切発言投稿経験には FTF での不適切発言経験が単独で影響していた。一方で、SNS への不適切写真投稿経験には、FTF での不適切発言を多く経験している者が SNS 上に対する許容度を高めてしまうことが影響していた。加えて、SNS を利用した自己開示欲求も影響していることが分かった。

考 察

本研究では、大学生における SNS の利用実態と SNS 上に見られる不適切行為との関連に着目し、この不適切行為が、FTF コミュニケーションによってすでに存在していた行為が SNS を通して顕在化されたもの (SNS の不適切行為表出の媒介機能) なのか、それとも、SNS によって新たに生み出された行為 (SNS の不適切行為創出機能) なのかを検討した。

その結果、FTF において不適切発言を経験することが、SNS への不適切発言投稿経験に影響を及ぼしていた。一方で、FTF での不適切発言を経験している者が SNS 上に見られる不適切行為に対する許容度を高めてしまうことが、SNS への不適切写真投稿経験に影響を及ぼしていた。加えて、SNS を利用した自己開示欲求も SNS への不適切写真投稿経験に影響していた。このことは、SNS への不適切発言投稿経験と SNS への不適切写真投稿経験の発現機序が異なっていることを意味しているともいえる。すなわち、SNS への不適切発言投稿は、日頃の FTF にて不適切な発言や行為を行ったりすることが、SNS を通して顕在化したものと考えられる。一

方で、SNS への不適切写真投稿は、FTF にて不適切な発言や行為を行ったりする頻度の高い者が、SNS でも同様の行為を繰り返す結果、SNS 上に見られる不適切行為に対する許容度を高めてしまい、そのことが SNS への不適切発言投稿にとどまらず、SNS への不適切写真投稿に対する閾値を下げることに繋がったのではないかと考えられる。

こうしてみると、SNS への不適切発言投稿に対しては SNS の不適切行為表出の媒介機能が、SNS への不適切写真投稿に対しては SNS の不適切行為創出機能がそれぞれ働いていたと考えることができよう。

この可能性を検討するために、本研究ではさらに、FTF での不適切発言経験 (0= 投稿経験自体なし、1= なし、2= あり) を独立変数、SNS への不適切発言投稿経験 (0= なし、1= あり) を媒介変数、SNS への不適切写真投稿経験 (0= なし、1= あり) を従属変数とするロジスティック媒介分析 (cf., Baron & Kenny, 1986; Preacher & Hayes, 2004) を実施した。結果を Figure 1 に示した。結果をみると、FTF での不適切発言経験から不適切写真投稿経験への直接効果は有意であったが ($\beta = .624$, $p < .001$)、媒介変数を統制すると直接効果に減衰がみられた ($\beta = .457$, $n.s.$)。ブートストラップ法 (cf., Preacher & Hayes, 2004, 2008) を用いた間接効果の検定を行った (5000 サンプル) ところ、標準化係数は .180 (95%CI: -1.32 ~ 2.63) となり、有意な間接効果はみられなかった。したがって、上で示した可能性は検証されなかった。そのため、代替説明のための分析として、媒介変数と従属変数を入れ替えたロジスティック媒介分析を実施した。結果を Figure 2 に示した。結果をみると、FTF での不適切発言経験から不適切発言投稿経験への

直接効果が有意であり、媒介変数を統制すると直接効果が減衰がみられた ($\beta = .987 \rightarrow \beta = .885, p < .001$)。ブートストラップ法を用いた間接効果の検定を行った (5000 サンプル) ところ、信頼区間に 0 を含んでおらず (95%CI: 1.17 ~ 4.76)、標準化係数は .1003 となり、有意な間接効果がみられた ($p < .01$)。したがって、本分析では SNS への不適切写真投稿経験が部分的に媒介していることが示された。

以上より、SNS への不適切発言投稿経験が FTF での不適切発言経験と SNS への不適切写真投稿経験を媒介していることは証明できなかったため、この点については既述の考察との矛盾点を解明するための理論的な精緻化を行ったうえで、さらに検討を重ねていく必要があるだろう。

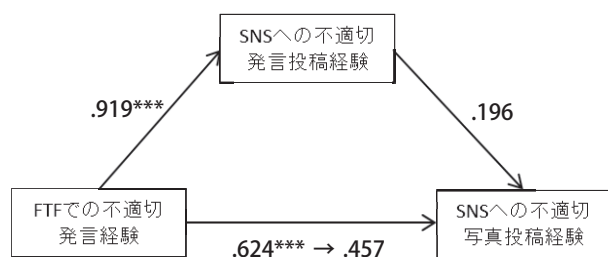


Figure 1 SNSへの不適切発言投稿経験を媒介変数とする媒介分析の結果 ($n=80$)
図中の数値は近似標準化係数である。
*** $p < .001$

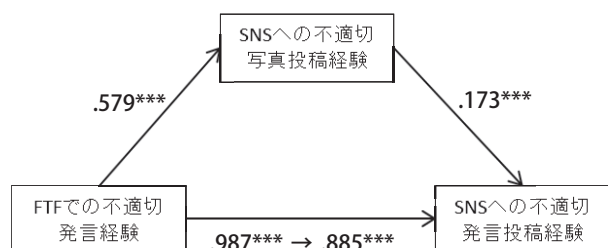


Figure 2 SNSへの不適切写真投稿経験を媒介変数とする媒介分析の結果 ($n=80$)
図中の数値は近似標準化係数である。
*** $p < .001$

SNS はこれまで、自己の客観視や明確化を生じさせ、他者との関係を改善していく効果を持つ (藤・吉田, 2009) など、気軽に素早く友人関係を形成するきっかけを作ったり、関係を形成する際のハードルを下げるためのコミュニケーション・チャンネルとして機能してきている。その一方で、没入的・依存的な SNS 利用は、社会性の低下や過度に対人獲得的・自己開示的な行動を誘発するなど、現実とのバランスを崩しかねない危険性も報

告されていた (藤・吉田, 2009; 高橋・伊藤, 2016)。また、SNS が友人関係満足感を高めるわけではないこともほぼ一貫して確認されていた (本多, 2016; 黒川・吉武・中山・三島・大西・吉田, 2015; 渡部・永井・桑原, 2014)。

このように、心理学領域における SNS コミュニケーションに関する研究では、SNS の利用がもたらす功罪や、それに関連するパーソナリティや態度に着目した議論 (e.g., 佐藤・太幡, 2014; 高橋・伊藤, 2016) が主になされてきていた。しかしながら、SNS 上にさまざまな発言を顕在化させてしまう心理機序を FTF コミュニケーションと関連づけながら包括的な文脈で検討した研究はほとんど見当たらないのが現状であった。したがって、SNS 上における種々の発言がどのような心理機序によって顕在化するかを検討した本研究は、FTF コミュニケーションを含む包括的対人コミュニケーションの文脈において SNS コミュニケーションの問題を FTF コミュニケーションと関連づけながら議論することができた点において意義があったといえるだろう。

ただし、本研究では SNS コミュニケーションの発現機序を明確に示すことができなかった部分もあるため、さらにデータを蓄積することによって既述の矛盾点を解明していくことが必要となる。また、本研究では、大学生を調査対象として SNS の利用実態と SNS 上に見られる不適切行為との関連について検討を行ったが、他の年代を対象に調査を行った場合にも一貫した結果が得られるかを明らかにしていく必要がある。また、同じ大学生であっても、これまでにメディア・リテラシーに関する教育を受けた経験の有無によって結果に違いが生じる可能性も考えられる。こうした点も考慮しつつ結果の一般化を検討していくことが必要である。

加えて、本研究では、SNS に関連する質問項目に、SNS が「LINE」を含んでいるか否かを明確に示してはいなかった。そのため、日頃 LINE を SNS コミュニケーションの主要な手段として用いている調査対象者は、SNS を使用していないと回答した (LINE は本研究でいう SNS には含まれないと考えた) 可能性も考えられる。さらに、現代の SNS には、いわゆる「裏アカウント」なるものも存在しているようである (下田, 2008)。しかしながら、調査対象者が行う回答は、通常は「表アカウント」に関するものだと考えるのが妥当であろう。したがって、もしも「裏アカウント」のようなコミュニケーション・チャンネルがまた別に存在するならば、本研究で

用いた質問項目によって調査者が本来意図した回答を調査対象者から適切に引き出せたかどうかにも疑問が残った。よって、こうした問題点を整理しつつ、慎重に検討を進めていく必要があるだろう。

引用文献

朝日新聞 (2013a). 4月9日夕刊 第2社会面, 10.

朝日新聞 (2013b). 9月15日朝刊 第1社会面, 33.

Baron, R.M., & Kenny, D.A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1173-1182.

藤 桂・吉田富二雄 (2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響——ウェブログ・オンラインゲームの検討より—— 社会心理学研究, 25, 121-132.

本多麻子 (2016). 大学生の日常的なポジティブイベントの構成要素——大学生はSNSよりも直接的なコミュニケーションに幸せを感じる—— 東京成徳大学研究紀要 人文学部・応用心理学部, 23, 103-112.

黒川雅幸・吉武久美・中山真・三島浩路・大西彩子・吉田俊和 (2015). 大学新入生の友人関係におけるFTFおよびSNSコミュニケーション 対人社会心理学研究, 15, 55-62.

Preacher, K.J., & Hayes, A.F. (2004). SPSS and SAS procedures for estimating indirect effects in simple mediation models. *Behavior Research Methods, Instruments, and Computers*, 36, 717-731.

Preacher, K.J., & Hayes, A.F. (2008). Asymptotic and resampling strategies for assessing and comparing indirect effects in multiple mediator models. *Behavior Research Methods*, 40, 879-891.

佐藤広英・太幡直也 (2014). 情報プライバシーがインターネット上におけるコミュニケーション行動に及ぼす影響 信州大学人文科学論集, 1, 83-91.

下田博次 (2008). 学校裏サイト 東洋経済新報社

総務省 (2013a). 平成25年版 情報通信白書 日経印刷

総務省 (2013b). SNS (ソーシャルネットワーキングサービス) の仕組み (http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/security/basic/service/07.html) (2016年12月28日)

総務省 (2014). 平成26年版 情報通信白書 日経印刷

総務省 (2015). 平成27年版 情報通信白書 日経印刷

総務省 (2016). 平成28年版 情報通信白書 日経印刷

高橋尚也・伊藤綾花 (2016). SNS 利用における青年の対人関係特性——Twitter と LINE 利用時の行動に注目した検討—— 立正大学心理学研究所紀要, 14, 39-50.

渡部雪子・永井智・桑原千明 (2014). 大学生における援助要請の方法と適応との関連の検討 立正大学心理学研究年報, 5, 47-53.

注

1) FTF コミュニケーションにおける発言を意図していることが回答者に適切に伝わるよう、質問紙調査実施時に補足説明をしていた。

付記

本稿は、第2著者が関西福祉大学社会福祉学部に提出した平成26年度卒業論文をもとに、第1著者がデータの再分析および結果の再考察を行い、問題部分を含めて全面的に改稿したものである。また、本研究は日本発達心理学会第27回大会において発表された。